

幕末日本における中国観の変化

日 比 野 丈 夫

一

江戸幕府はその末期に、外国貿易の状況を視察するとともに試験的な通商を行い、併せて外国事情を探索する目的から、三回にわたり東アジア各地に船舶を派遣した。第一回は文久元年（一八六一）四月、箱館奉行の派遣した官船亀田丸で、北樺太のアレキサンドロフスク（歴山港）を経由、間宮海峡を渡り、黒龍江を溯航してニコライエフスク（尼港）に到達、一カ月半ばかり滞在のち箱館に帰着した。第二回は文久二年（一八六二）幕府自身の派遣した千歳丸^{せんざいまる}で、四月に長崎を出帆して翌月上海に到着、二カ月の滞在をへて七月長崎にもどった。これについてはのちに詳しくのべるであろう。第三回はやはり箱館奉行所所属の健順丸で、最初の計画では英領香港と蘭領バタビアへ行くはずであった。しかし方針が変り、文久三年（一八六三）品川を出帆して兵庫に到達、翌元治元年（一八六四）二月兵庫を出て上海に至り、滞在一カ月半で四月長崎に帰着し、七月品川にもどったのである。

第二回の千歳丸派遣は、幕府の手によって行われたとはいえ、わが国最初の上海貿易の試みであり、鎖国の夢を破って積極的な海外貿易通商に乗り出そうとした記念すべき事件であった。千歳丸はもとイギリス籍でアーミステイス *Amistice* 号といい、幕府が上海貿易のため長崎で買上げたものである。三五八トン、三本マストの木造帆船であった。乗組員としては、幕府から勘定役根立助七郎、支配勘定金子兵吉、御徒士目付鍋田三郎右衛門、御小人目付塩澤彦次郎、同犬塚鏖三郎ら五人、長崎奉行所から調役並沼間平六郎、書物編集方御雇中山右門太（英語通辯）、定役中村良平ほか、唐通詞、蘭通詞、御雇医師ら七人、地元長崎商人松田屋伴吉ら三人、それに従者二十三人、賄方六人、水夫四人、日本人総

幕末日本における中国観の変化

勢五十一人。そのほかアームステイス号以来の船長リチャードソン Henry Richardson 以下英人十五名(中の一名は船長夫人)、別に長崎在留のオランダ商人トンプレンキが御雇として乗船したのは、日本から上海へ出貿易の先例がないため、千歳丸が上海に到着すればオランダの領事が積荷の売却や、現地商品の買入れについて斡旋することになっていたのである。積荷の主なものには長崎俵物三品(煎海鼠・干鮑・鱧鱈)をはじめその他の海産物、陶磁器、漆器などの諸雑器から石炭までであった。

千歳丸は文久二年四月二十九日(以下月日は旧暦による)の朝、長崎港を出帆、翌日五島沖に出て女島の南を通過。五月一日は終日風波に悩まされたが、二日に風止み、三日は無風にて徐行、四日午後に至り西に鞍島を望む。五日早朝ついに揚子江口より溯り、正午呉淞江口に到着して投錨し、直ちに上海のオランダ領事に連絡した。翌六日午前五時十五分、曳船用の蒸汽船に引かれ、唐船、外国船の間をかき分けるようにして呉淞江(黄浦江)を溯る。千歳丸の三本マストには、中央に英国旗、前方に和蘭国旗、後方にわが日章旗をかかげ、約四時間で上海バンドのオランダ領事館前に到着し投錨した。バンド(黄浦灘)に立ち並ぶ各国の商館、江上に碇泊中の百隻を越える外国船艦や無数の中国戎克の群に、日本人はまず驚嘆の声を上げたのである。

まもなくオランダ領事館から使者が小舟でやってきたので、日本の公役三人(公役とは前記の根立助七郎以下八名をさす)と通訳とは同道して領事館に行き、貿易についての斡旋や一行の宿舍の紹介などを依頼した。七日には中国戎克二艘を雇い入れ、午後一同はこれに乗って上陸、オランダ領事館に至れば匾額に「點耶洋行」とある。點耶洋行とはチ・クルース商会 T. Kroes and Co. の中国名で、その主人チ・クルースがオランダの領事でもあったらしい。従って、商会の建物は領事館でもあったわけである。(後記『文久二年上海日記』の外山軍治氏の解説による) その場所はフランス租界にあって、上海城の老北門より東の方三町ばかり、永安街にあったという(後記の峯潔『清国上海見聞録』による)から、バンドに臨みフランス領事館の南に当たっていたのであろう。一行の宿舍はその隣の宏記館という洋風の旅館にきまり、九日に船中から畳などを運びこんで大部分のものはここに移った。

八日公役以下一同は、オランダ領事、フランス領事館員の先導で上海道台を表敬訪問した。道台とは上海における清朝の最高官で、正式には分巡蘇松太兵備道兼管水利事務といい、江蘇省の蘇州・松江二府と太倉州の行政、司法、財政、軍事の実権を握り、また海関道をも兼ねて江海関(上海税関)を管理する任にあった。当時の道台は吳煦。オランダの領事、日本の公役等は肩輿に乗って城内に入り、道台の庁の大門に至れば

祝砲三発、ついで喇叭を吹奏して門扉を開く。中に入って輿を下れば道台は二門の外に出迎えて礼し、一行を導いて三門より入り、公役等を庁堂に案内して挨拶をかわす。従者等も別室で茶菓、酒肴の饗応を受ける。辞去のさいも道台が二門の外まで見送ること初めと同様であった。

十一日公役らはオランダ領事の招宴に臨み、翌十二日にはフランス領事館を訪問して挨拶。同日から千歳丸の積荷の陸揚げが始まる。十三日には公役ら英、米、露の各領事館を歴訪。二十三日は日本側が道台をオランダ領事館に招待して宴会、領事チ・クルースは巧みにその間に周旋して、問答に渋滞を生ぜしめなかった。公役らはこのような儀礼的な訪問のほか、道台やイギリス領事館などにも行っているが、江戸役人にはとり立てていうほどの用事もなかったようである。積荷の売りさばきや将来の貿易見透しなどについて接衝し、多忙だったのは長崎役人と松田屋伴吉らの長崎商人だったであろう。一同を驚かせたのは悪疫（疑似コレラ？）の流行で、到着後わずかに数日、五月十四日に葉種目利頭取の渡辺与八郎の従僕伝次郎と賄方の兵吉とが半日のわずらいで急死、六月十四日には蘭通事岩瀬弥四郎の従僕（実は弥四郎の弟）大村の吉川碩太郎が死んだ。

六月下旬になると帰国の準備に忙しく、三十日には道台へ離別の挨拶。七月一日千歳丸に乗船、乗組の日本人は三人の死者が出て総計四十八人。往路に同行した長崎のオランダ商人トンプレンキは、すでに十四日英国船に乗じ長崎に向って帰った。船の操縦にはオランダ船員十人を雇う。五日午後、曳船に引かれて出発、その夜は呉淞江口に投錨して一泊。六日早朝に抜錨したが、海上の労苦は往路と変わらず、十三日正午頃ようやく長崎港口に到達、翌十四日午後、無事に上陸することができたのである。十五日には小舟で千歳丸から荷物を運んだ。

二

文久二年上海へ派遣され千歳丸には、公役の従者として各藩から選抜された少壮気鋭の武士や学者が乗込んでいた。中でも御小人目付犬塚鏱三郎の従者であった長州の高杉晋作、御小人目付塩沢彦次郎の従者であった肥前の中牟田倉之助の二人はとくに有名だ。高杉は申すまでもないが、中牟田は日本海軍の創始者の一人なのである。

高杉自筆の記録は『遊清五録』の名で、大正五年民友社発行の『東行先生遺文』に初めて収載された。内容は『航海日録』『上海掩留日録』

幕末日本における中国観の変化

『統航海日録』（以上甲部）『長崎淹留雜録』『航海日録』『内情探索録』『外情探索録』（以上乙部）の順序からなる未整理の草稿であるが、『遊清五録』と題をつけているところをみると、高杉自身が整理して定稿を作るつもりだったのかも知れない。中牟田の記録は『長崎より上海迄航海日記』『長崎より唐国上海迄航海日記』（ともに文久二戊四月廿九日より五月六日迄とあり）、『上海行日記』（文久二年四月）、『上海滞在中雜録』（文久二年五月）、『公儀御役々唐国上海表にて道台其外と応接書』（文久二年夏）、『上海渡航記事』（文久二年）の六種で、関係者に聞くと今日も中牟田家に保存されているということだが未刊である。しかし、その内容は中村孝也編『中牟田倉之助伝』（大正八年、中牟田武信発行）の第十二から第十四章の間に随時参照あるいは引用されていて、以上の記録は同書の「附録一 中牟田倉之助日記目録」の中にみえる。

後世に名をなした人では、薩摩の五代才助（友厚）が従者として随行するはずだったが定員を超過したので、水夫となって船艙にひそんでいたのである。上海に到着するとイギリス人の乗組員が去ったのち、五代は千歳丸に残って船の管理と日本人水夫の統率を命ぜられた。しかし、もともと藩命を帯びて上海の市況、貿易に関する調査や汽船を買収などすることが目的だったから、上陸して自由行動をすることもあれば、船内へたずねてきた高杉とともに英人牧師ミューヘッドを訪問したようなこともあった。五代はすでにこの年の一月から二月にかけて上海へ渡り、薩摩藩のために汽船を購入したりしているから、当地の事情には通じていたのである。今回の千歳丸による渡航のさいにも上海で汽船を買収したと伝えられるが、五代自身も日記類などを残しておらず、そのような事実はなかったのではないかといわれている。

乗組員の日記として次に比較的早くから知られているのは、長崎商人松田屋伴吉の『唐国渡海日記』である。大正十一年長崎高等商業学校の川島元次郎氏が、同校の『商業と経済』第二冊所収「開国以後最初の上海貿易」という論文に紹介し、上海における商業交渉の実際面を記した貴重な資料として高く評価された。（同論文は大正十五年平凡社発行の『南国史話』にも収録）この日記は松田屋伴吉の縁者の家に伝えられたもので、今日では長崎大学図書館に所蔵されており、十三冊の附属文書がある。後記沖田一氏は、昭和十七年その日記だけを『上海研究』第一輯（上歴海史地理研究会発行）に収載されたということだが、わたくしはまだこれを見ていない。

次に世に出たのは、勘定役根立助七郎の従者であった肥前佐賀の納富介次郎の『上海雜記』、支配勘定金子兵吉の従者であった美濃高須の日比野輝寛（掬治）の『贅臈録』と『没鼻筆語』で、昭和二十一年『文久二年上海日記』と題し、外山軍治氏の解題を付して全国書房から刊行された。納富について高杉は「画工之由也、未だ年少也」といっているが、その内容は識見に富み、しかも要領がよい。日比野の『贅臈録』は文久

二年四月二十七日から七月十五日に至る詳細な日記、『没鼻筆語』はその間における中国人との筆談録である。日比野輝寛はわたくしの祖父であるからその経歴もよくわかるが、納富介次郎のことは当時不明で、外山氏の解説にもきわめて曖昧な記述しかなされていまい。ところが、その後くわしい伝記が明らかになったので紹介しておく。これは納富氏の姻戚に当る長澤光男氏の示教によるのであるが、長い間発表の機会が得られず、心ならずも放置していたことをお詫びしなければならない。

伝記というのは、納富氏が創立した富山県立工芸学校内に銅像が建設されたとき、編集された『納富介次郎先生銅像建設記念帖』（昭和九年、富山県立工芸学校内銅像建設委員発行）に収録されたもので、納富氏の縁者田中基臣氏の筆になるという。以下はその抜萃である。

先生は肥前国小城藩の皇学家神道実任教管長柴田花守翁の次男に生る。令兄礼一氏は其二代の管長たり。先生十六、本藩佐賀の義士納富六郎左衛門氏に養はれ其姓を冒す。

先生甫め十三、父花守翁に宿志を訴え、单身藩を脱して長州萩に遊び、陽に書画の技を売り、凶る所あらんとせしも、半途父君の追迹する所となり伴はれて帰国せり。

越て数年、名を画学研究に藉りて長崎に遊び、逸雲、鐵翁等画伯の門に出入し、密かに国事に奔走する旁、南宗画法の蘊奥を修得し、文久二年十九、鍋島閑叟公の手許金を賜わり、幕吏に従ひて清国上海に航せり。行を共にする者、同藩の中牟田倉之助、長州の高杉晋作、薩摩の五代才助等あり。其婦朝するや、清朝政権の視察より、長髪賊の現状、貿易市場の実況、並に欧州諸強国の東洋に対する政策に及ぶまで、其過去、現在、未来を通じて仔細に意見を附せる報告書を綴りて復命したるが、少壮気鋭、言辞潑刺、大いに俗吏の忌む所となりたりという。

しかし多病だったので、志士等と維新の大業に与ることができず、その後また貿易のため上海に渡航し（明治三年）、とくに美術工芸品の海外輸出に貢献すること多大で、フランスのパリ（慶應三年）、オーストリアのウィーン（明治六年）、アメリカ合衆国のフィラデルフィア（明治九年）における万国博覧会に日本の随員として参加した。帰国後は石川・富山・香川の各県に工芸学校を設立して子弟の教育に尽瘁、大正七年三月、七十五歳をもって死去した。

『文久二年上海日記』が刊行されてまもなく、かねてから上海史の研究家であり、とくに千歳丸のことに深い関心をもっておられる沖田一氏
幕末日本における中国観の変化

が、丹念に採集した関係史料を日文、欧文、華文に分け総計四三点を紹介された。「幕府第一次上海派遣官船千歳丸の史料」上（東洋史研究十巻一号 昭和二十二年十二月）、同下（同十巻三号 昭和二十三年七月）がそれである。その中ではノースチャイナ・ヘラルド紙 North-China Herald を克明に調査されたことがみえ、あるいはクーリングの上海史第二巻 Couling: The History of Shanghai, vol. II のごとき稀観書中の記事を紹介されているのはとくに敬意を表さねばならない。

沖田氏の史料にも上げられているが、未刊行のものとして御徒士目付鍋田三郎右衛門の従者であった濱松の名倉予何人（敦）、医者尾本公同（大村藩）の従僕であった大村の峰潔（源藏）の記録がある。名倉のはかつて白柳秀湖氏の紹介によって知られるようになったもので、名倉の門人内田正の子孫の家に所蔵され、『海外日録』『支那聞見録』『滬上筆語』『滬上筆語拾遺』の四点からなっている。『海外日録』は文久二年四月二十七日より同七月十四日に至る日記、『支那聞見録』はその間の見聞を随筆風に綴ったもので、名倉は兵学家でもあったから李鴻章の軍営の操練などもたびたび見学しておって、その方面の記事が豊富である。

名倉はその後も何度か上海へ行った。文久三年には遣仏使節池田長發（筑後守）に随行した調役田中廉太郎の従者として、十二月二十九日フランス軍艦で横浜港発、翌元治元年七月十八日横浜に帰着したが、その往復に上海に立ちよったことが『航海日録』（副使河津伊豆守祐邦の従者高橋留三郎と共同執筆）にみえる。『航海外日録拾遺』はそのときの筆語録である。その次は砲術修業のため総勢九人、香港へ派遣されたときで、慶応三年一月十一日イギリス船にて横浜港発、四月一日横浜帰着。往きに上海滞在中、火輪船に乗って南京に至り、長髮賊平定後の荒廃ぶりを視察し、帰路は鎮江にも遊んだ。そのときの記録が同行者安倍保太郎の筆になる『支那見聞録』（假称）で、筆談は『三次壯遊録』（同行者大林虎次との共著の形をとる）と名付けられている。名倉は六年間に四度上海に行っているのだから、これらの記録によって移り行く上海の状況がうかがわれ、きわめて興味深いものがある。

峰潔の記録は『清国上海見聞録』と『船中日録』の二つで、もと峰氏の姻戚山下家にあったが、のち長崎県立図書館の所蔵となった。見聞録は洋中記事と上海見聞からなり、後者は地形風土、制度、事情に分け、筆談を所々にさしはさんでいる。『船中日録』は出発前の四月七日から書き起しているが、途中で終わっていて、全体としてみれば備忘録のごときものである。峰は上陸して宏記館に宿をとらず、殆んど千歳丸におったようであるから、五代の動静にはよく通じており、高杉が五代をたずねてきて相談をもちかけ、二人が行動をとるにしておったことも日録に

よってわかるのである。

以上はいずれも従者や商人たちの記録で、沖田一氏もいっておられるように、文久二年の貿易船上海派遣については公式の記録、少くとも責任の地位にあった公役等の記録が見当らない。ただ一つそれに近いものとして、外務省所蔵の『続通信全覧』所収の「長崎千歳丸上海へ発航一件」が、本庄栄治郎氏編『幕末貿易史料』（昭和四十五年、経済史研究会叢刊第三冊）に採録されている。文久二年壬戌五月、長崎奉行より勘定奉行に照会とあって、四月二十九日に長崎を出港した千歳丸は五月五日に上海に着船、その後同九日までの経過を上海駐在のアメリカ領事の手を経て長崎奉行まで報告したものである。

三

さて、文久二年当時における日本国内の情勢はどうであったか。千歳丸が長崎を出帆した四月は、それまで盛んだった尊攘派が一時衰え、代って公武合体派が勢力を得たときである。尊攘派志士は幕府の開港政策に反対し、日本に駐在する西洋人やその使用人をつぎつぎに殺害し、文久元年五月には水戸浪士が江戸高輪東禅寺のイギリス公使館に大規模な襲撃事件をおこした。幕府がしだいに窮地におちいつて行くのを見て、雄藩の中には朝廷の權威を借りて幕政に介入し、公武合体を意図するものもあった。幕府でも老中の久世広周、安藤信睦はこの情勢に応じて積極的に公武合体策を進め、皇妹和宮の將軍家茂への降嫁を実現させたのである。和宮は文久元年十月に京都を出発、翌月江戸に到着し、婚儀は二年二月に行われた。ところが婚儀に先立つ一月十五日、安藤正睦が尊攘志士に襲われて負傷した、いわゆる坂下門外の変がおこっている。

雄藩の中では、長州藩主毛利慶親は長井雅楽の意見に従って、公武合体に積極的な活動を始め、薩摩でも藩主島津忠義の父久光が実権を握り、公武合体による幕府の改革をめざしていたのである。しかし、急進的尊攘派はこのような手段を手ぬるしとして続々と京都に集まり、実力をもって倒幕行動を起そうと天下騒然たるものがあった。そのまっただ中に、島津久光が薩摩藩兵一千余人を率いて、文久二年四月十六日京都に入ってきたが、目的は京都・江戸間を周旋することだったのである。その真意を理解できない尊攘志士等は薩摩の急進派を中心として、今こそ倒幕の口火を切る時がきたと信じ、伏見の寺田屋に宿をとって拳兵の計画を練った。四月二十三日久光はこれを鎮撫するために部下を派遣

したが、ついに薩摩兵同志の乱闘となり、急進派の首領はことごとく殺された。有名な寺田屋事件である。

島津久光は朝廷に対して幕政改革を勧告するための勅使派遣を請い、五月には勅使大原重徳を護衛して京都を立ち、六月江戸に到着した。その結果、一橋慶喜の將軍後見職、松平慶永の政事総裁職就任などが実現したが、尊攘志士の実力行使は全国的に暴威をたくましくするばかりであった。これに対して幕府がとくに京都の治安維持のため、京都所司代の上に守護職をおき、文久二年閏八月松平容保が任命されて年末京都に着任した。このころ薩摩藩の上層部ではなお公武合体論が主流をなしていたのに対し、長州藩では尊攘派がしだいに主導権を握り、倒幕運動の中心となっていたことに注意しなければならない。

かくのごとき日本国内の情勢は、どのような形で上海に伝えられたかという点、高杉の『上海掩留日録』文久二年六月八日の条に、

至千歳丸訪五代。五代云。国書来。書中云。京撰間少有変。我藩亦関其事。予聴之少警。五代云。事決已填。兄勿憂。予魂飛心走。千里海濤。難為如何。空望東方空。慨然久之。午後到蘭館。求短銃及地図。

とある。この京撰の変というのが何をさすのか具体的でないため、いろいろと説をなすものがあるが（中村孝也『中牟田倉之助伝』）、次の日比野の『贅臆録』の記事からして、寺田屋事件であることは誤りないと思う。同書六月十一日の条に、

夜人アリ云フ。英夷ノ蒸気船入港シ云フ。日本伏見ニテ大ナル変アリ。夫レ洋夷ノ鬼子ヲ何ヲ以テ伏見ノ変ヲ知ルヤ。……今ヤ万里ヲ隔絶シ、其ノ虚実知ルベカラザルモ、洋夷ノ速カニ我国事ヲ知ツテ流言スル。実ニ悪ムベキク又オソルベシ。嗟々。とある。

情報の入手に三日の差があるが、これによって高杉は薩長関係の深酷さと長州藩の立場の将来に思いを致し、日比野は外国の探偵力と報導の速さに感嘆した。それにしても、千歳丸の長崎出港の前六日に起きた変事を、上海在留の日本人はこのとき一月半も遅れて知ったのである。

中国では文久二年は同治元年に当り、前年の咸豊十一年七月文宗皇帝が熱河離宮でなくなり、七歳の皇太子が帝位（穆宗）についた。皇帝が幼少なため、東太后（文宗の正皇后）と西太后（穆宗の実母）が垂簾の政を行い、先帝の弟恭親王が議政王に任ぜられてこれを輔佐することとなった。ときに、道先三十年（二六五〇）に始まった太平天国の反乱は、十三年目を迎えても鎮まる気配がなく、ことに上海の周辺では連日戦争が続いていた。広西省で旗上げした太平軍は、咸豊三年（一八五三）南京を占領してここを国都と定め、西に北に軍を派して全国を席捲し、戦火が及

ばなかったのは十八省中わずかに五省だったといわれる。かれらは清朝への反抗を示すため、弁髪を廃し前部の頭髪を長く伸ばしたので、長髪賊だの長毛賊だのと呼ばれた。さしも強盛を誇った太平軍の勢が衰えたのは、曾国藩の湘軍が大攻勢に出て揚子江中流域の要地をつぎつぎに奪回したからで、咸豊十年、十一年（一八六〇—一八一）にかけ太平軍は鋒先を安徽から江蘇、浙江方面に転じた。

咸豊十年、太平軍の忠王李秀成は江蘇に進んで常州、蘇州、松江を占領、同年七月には上海を攻囲し、仏・英租界に迫ったが、守備隊に敗れて退却をよぎなくされた。翌十一年になると、太平軍は江西より浙江に入り、紹興、台州、寧波を占領し、ついに杭州も李秀成の手におちた。十一月の末のことで、翌同治元年の初めには李秀成が再び上海攻撃を開始したのである。それまで中立的態度を持っていた英仏等の諸外国も自分たちの権益を守るため、清朝側に協力して太平軍の上海進攻を防がねばならなくなった。中国商人の要請によって組織された、米人ウォード Frederick T. Ward の率いる外人部隊には、中国人をも募集増強することとなり、その名も常勝軍と名づけられた。常勝軍は英仏軍隊と連絡をとって太平軍の防戦に威力を示したが、三月には李鴻章の淮軍がイギリスの蒸気船を借りて安慶から上海に到着した。李鴻章は江蘇巡撫に任せられ、上海城の大南門外に駐在することにきまった。

このようにして上海防衛の準備が整った四月には、嘉定、青浦、奉賢、南橋、柘林等を占領したが、たちまち五月には嘉定、青浦を奪回され、李秀成の軍は上海城近くまで肉迫してくるというありさまである。千歳丸が入港したのは、まさに上海近傍の戦況が一進一退を繰り返している最中であつた。

従つて、千歳丸の日本人は上海滞在中 太平天国のことにはとりわけ敏感であつた。五月五日まだ上海に到着せぬ前、吳淞江口に投錨中、日比野の『贅臆録』によれば、

哺下西ニ火焰天ヲ照ス。船長云フ、長髪賊ノ人家ヲ焼クナルベシ。是又知ルベカラズ。
とあり、翌六日の条には、

……暫クシテ唐人来リ筆語ス。余昨日西方ニ起リシ火焰ヲ問フニ、王誠齋ノ答ヘニ、七保（寶）鎮ト云フ処ニテ賊ノ戦争アリシヨシ。とみえる。かれらは上海新報を手に入れて貪るように読み、あるいは中国人と会えば筆談によって太平天国の情報を収集した。上海新報とはノースチャイナ・ヘラルドの週刊漢字版で、一八六一年（文久元年）の創刊という。ただし前記沖田氏もその実物は見えておられない。

名倉の『支那聞見録』にはつぎのようであり、納富の『上海雜記』にも殆んど同様の記事がみえる。

上海新報載スル所ニ擲レバ、滬城ヲ去ル三、五里ノ遠キ処ニ於テ、李(鴻章)撫軍屢々長匪ト戦シコトアリ。此レ吾輩本地淹留中ノ事ニ係レリ。又浦東ニモ賊起リ、英国在滬ノ蛮兵等ノ支那官軍ヲ助ケ征シタルコト、亦五月中ノ新報ニ見ヘタリ。太平天国の情報をもつとも多く伝えているのは日比野の記録で、『贅疣録』には六月四日の条に、

且ツ聞得タリ、賊首四眼狗、姓ハ陳、名ハ玉成ト云フ者、寿州ニテ苗沛霖ニ誘カレ囚トナリ、勝保大帥ノ營中ニ至リ、ソノ言ニ、我ハ広西梧州府藤県ノ者ナリ。十四歳ノ時洪秀全ニ従イ広西ヨリ金陵ニ至ル。ソノ後封セラレテ英王トナリ、天朝九門羽林軍ヲツカサドル。咸豊四年ヨリ今日に至リ、到ルトコロソノ勢破竹ノ如クカタザルハナシ。ハカラズ今日虜トナル。我レ天朝ノ恩ヲ受クル、衆トカハリ尤モ重シ。故ニ投降スルアタハズ。敗軍ノ將、顔セノ生ヲ求ムルナシ。惟我ガ帶スルトコロノ兵卒、皆百戦百勝、今存スルヤ否ヤ。是惜シムベキナリ。我罪ヲ犯ス尤モ大ナリ。刀鋸斧鉞、我一人受クベシ。衆ニ於テアツカルナシト云フ。故ニ金陵危急ニテ落城近キニアルヨシ。去月英王衆ヲヒキイテ投降スト云フハ虚ナリ。

とある。英王陳玉成が寿州で捕虜となったのは同治元年四月十七日のことで、六日のち潁州の勝保の營中に送られ、翌月殺された。日比野が上海でこれを聞いたのは約一月のちである。また六月十一日の条には、太平軍の捕虜となり各地を転々したのち先月蘇州から逃げ帰ってきたものを、春齡という医者がつれてきたのに会った。このものは全く字が書けないため、春齡を介し筆談によって太平天国の事情を聞いたのであって、その内容は『没鼻筆語』中にみえる。

日本人はまた文献資料の収集にもきわめて熱心であった。名倉の『支那聞見録』に、

建天京於金陵論ト云ヘル書ヲ見ルニ、太平天国癸好三年新鐫(癸好三年は咸豊三年)ト題セリ。是ハ長髮賊ノ定京議論ヲ集メタル珍書ナリ。意謂フニ長匪ノ徒著ス所ノ書類モ蓋シ少ナカラジ。

この『建天京於金陵論』は程演生の『太平天国史料』第一輯(一九二六年 北京大学刊)の中に収められている。太平天国自身の出版した書物がそのときどれだけ収集されたかはよくわからないが、中牟田が上海滞在中に入手した書籍目録(『中牟田倉之助伝』)の中に、「長髮賊著述書 但写本十三冊」とあることからすると、随分克明に集めたようである。

かれらの滞在中における重要な仕事は写本で、帰国の日が近づくと夜の三更まで続けることもあった。（『贅脱録』六月二十八日の条）日比野は『盾鼻随聞録』を写し、（同書五月十一日の条）中牟田の前記目録には『金陵癸甲撫談』の名がみえるが、これは中牟田がみずから写したものである。いずれも太平天国に関する書で、日比野の『没鼻筆語』には後者は単に金陵撫談とあり、その著者謝炳は医者春齡の友人だといっている。『盾鼻随聞録』は日比野とともに金子兵吉の従者だった伊藤軍八（子幹）が、訓点、校語を付して大阪で出版し、（年時不明）『金陵癸甲撫談』は高見猪之助という人が訓点を付して、明治二年やはり大阪で出版した。太平天国の最新の正確な情報は、このようにして日本国内に広く伝えられたのである。日本での太平天国に対する見方が一変したのは、千歳丸によって新しい情報をもたらされたためであるといふことは、すでに市古宙三氏が詳しく論じられている。（幕末日本人の太平天国に関する知識―昭和二七年『開国百年記念明治文化史論集』所収）

四

千歳丸が上海を出帆するころにおいても、太平軍との戦線は膠着状態のまま進展をみなかった。それどころか七月の末になると太平軍はまた上海城に接近し、李鴻章の必死の防戦によってこれを食い止めることができたのである。八月の末には寧波が危険を告げたので、ウォードは常勝軍を率いて応援におもむくが、途中で戦傷死をとげた。太平天国の首領洪秀全が服毒して死に、南京を奪回して李秀成等を捕虜にしたのは、それから二年のち同治三年（一八六四）六月のことである。

上海滞在中に日本人が強い関心をもったのは、単に太平天国のことだけではなく、溯ってなぜ清朝がここまで衰弱し、西洋の輕侮を招くに至ったかということであった。いうまでもなく、それは道光二十年（一八四〇）阿片戦争において清朝はイギリスに屈服し、二十二年南京条約を締結して広東、厦門、福州、寧波、上海の五港を開いて英人の居住貿易を許可、香港島を割譲したのがもとで、二四年にはアメリカ、フランスとも同様な条約を結び、清朝は関税の自主権を失い、租界には治外法権が確立して、中国の半植民地化が始まるのである。やがて太平天国の戦争がおこると、まもなく上海城は小刀会匪に占領され、これを撃退して治安を回復するのに外国軍隊の援助を借らねばならなくなった。

一方、イギリスは広東でおこったアロー号事件、フランスは同国の宣教師が広西で殺害されたのを理由として、連合軍を組織し大沽から天津

に進撃して咸豊八年（一八五八）天津条約を結んだ。（米、露も参加）翌年その批准交換のために北京におもむこうとした英・仏両国公使は大沽で砲撃されたため、いったん引き返し、十年（一八六〇）再び連合軍を組織して北京に迫った。文宗咸豊帝は熱河の離宮に逃れ、連合軍は北京西郊の円明園離宮を焼き払って氣勢を上げた。このとき清朝と英、仏、露の諸国（米はずでに天津条約の批准交換をすまず）との間に締結されたのが北京条約である。北京条約は内容的には殆んど天津条約と変わらず、牛莊（營口）、登州、台湾（台南）、淡水、潮州、汕頭、瓊州（海口）に天津を加えた八港の開港、公使の北京駐在、キリスト教の布教や国内旅行の自由を認め、イギリスには九龍市街、ロシアには沿海州の割譲をとりきめたものであった。このように清朝と有利な条約を結んだ諸外国は、その權益を守るため、中立的態度を捨て清朝に協力して、太平天国を打倒するように方針を変えたのである。千歳丸の日本人はアヘン戦争、南京条約に関する知識は相当もっていたが、近年における英仏軍の天津、北京侵入については情報不足であった。名倉の『支那聞見録』にも、

余、咸豊年間中西ノ役ヲ記セシ書ヲ尋ネタレドモ、其書未ダ出デザルヨシ。只英法美俄四虜条約ノ書並ニ税則書各一本アリ。奏准天津新議通商條款、通商税則善後条約等はナリ。共ニ咸豊ノ末和議成テ後ノ条約ニ係レリ。

とあって、文献資料が少く、もっぱら聞き取りによって情報を収集していた。納富の『上海雜記』には咸豊九年の天津戦争について中国人に訊問したところ、出所不明ながら一つの記録を見せられたとあって、その大略を記している。日比野の『贅疣録』六月五日の条にも同じ材料によったと思われる記事がみえるが、この方はやや詳細である。

この事件に関連して名倉の『支那聞見録』には、(一)を付したのは原文割註)

咸豊以前ハ西虜ノ支那ニ来リテ貿易スル処五港ニ過ギザルガ、和議以来ハ十余港ヲ開キテ貿易スルコトナリタルヨシナリ。但シ十余港ノ内上海ヲ以テ現今互市ノ最モ盛ナル港口トス。蓋シ上海ハ本朝、朝鮮、天津等へ舟行ニ便利ナルヲ以テ互市日々ニ熾盛ナリト云。

宏記字号〔吾輩寓宿スル所〕ノ北五、六町許、黄（浦）江ニ傍フテ税関アリ。門楣ニ題シテ江南海関ト云。是ヲ看ルニ其結構宛モ本朝神社ノ大ナルモノノ如シ。

とあり、納富の『上海雜記』には海関の現状をつぎのようになっている。

上海海関ノコトハ、英人之ヲ司リ、黄浦ニ入船ノ船税ヲ取納ムルナリ。ソノ故ヲ尋ヌルニ、二十年以前コノ地初メテ開港ヲナシ、万国ノ商

客ヲ集メ貿易ヲ盛ンニセシト雖ドモ、洋商等清人ノ柔弱ナルヲ侮リ、ヤヤモスレバ制令ニ従ハズ不法ノ行ヒヲナセシヲ以テ、英人ヲ頼ミ海
関ノ税ヲ納メシム。然ルニ天津ノ戦争ニテ英軍ニ打負ケ、和約ノ為メ莫大ノ償金ヲ出スニ決定ス。是ニヨリ其後ハ上海ノ税銀ヲモ右償金ト
シテ年々英人ニ占取ラルル由。

英人が上海の海関を管理するようになったとあるのは、実は咸豊三年（一八五三）太平天国に鼓応して起った小刀会匪が上海县城を占拠し、海関
を焼き払ったとき、清朝の依頼によってイギリスが中心となり、米・仏とともに海関の機能を回復したことをいうのである。

清朝が不利な条件のもとにつきつぎと開港をよぎなくされ、欧米列強の勢力が浸透しつつあるのをみて、日本人たちは限らない憔悴に駆られ
た。太平軍を防備するためとはいいいながら、城門の警備を英・仏軍隊にゆだね、その出入させ中国の自由にならない状態であった。これは日
本人にはよほどの驚きだったとみえ、誰もが特筆大書している。名倉は『支那聞見録』に、

上海城門ハ辛酉ノ年（咸豊十二年）春間中西和議全ク調ヒシヨリ以来、英法兩國ノ兵士支那ノ兵ヲ助ケ共ニ之ヲ警備スルコトニナリタル由ナ
リ。

とあり、納富の『上海雜記』にも、

或ヒトノ話ニ曰ク、一日城内ヲ徘徊シ日暮ニ臨ンデ帰ラントセシニ、城門既ニ閉ヂテ往来ヲ絶ス。仏人等日本人ト見テ、即チ門ヲ開テ通ラ
シム。然ルニ土人等コレニ乗ジテ通ラントスルニ敢テ許サズ。時ニ官人ノ肩輿ニ乗リテ外ヨリ来リ、仏人ノ制止ヲ聞カズ往カントセシ故、
仏人怒リテ持チタル杖ニテ連撃シ、遂ニコレヲ退回ラシメシ由。嗚呼清国ノ衰弱ココニ至ル、歎ズベキコトニアラズヤ。（城門ハ七口トモ、
英仏二夷コレヲ分衛シ、晨六字ヲ以テ開キ、晚五字ヲ以テ閉ゾト云フ。）

とみえる。

さらに上海県の孔子廟（文廟）が閉鎖され、イギリス軍の陣営となっているのはいっそうの驚きであった。名倉の『海外日録』五月十七日の条
に、

余レ文廟ヲ拝セントセシニ、現今文廟ハ英虜ノ仮ノ駐防トナリ、夫子ノ聖像ハ南門内ノ也是園ニ移シタル由。

同じく六月三日の条には、

幕末日本における中国観の変化

文廟ニ至ル。時ニ英虜数枚余ヲ導キ廟内ヲ徧ク觀セシム。余レ之ヲ觀ルニ其結構甚ダ宏麗、大成殿等ノ匾額ハ依然トシテ猶存スレドモ〔聖像ハ南門内也是園ノ小学ヘ移スト云フ〕、廟庭ニハ英虜ノ白衣ヲ曬シ、各堂ノ瘴風腥キニ堪ヘズ。〔但シ文廟ヲ英人ノ防所ニナセシハ仮ノコトニテ、西門内ヘ別ニ英人駐防ノ落成ヲ告ルヲ待テ轉移スル由ニハ聞タレドモ、其光景イカニモ支那ノ衰世ニシテ國勢ノ萎靡振ハザルノ一端ヲ見ルベシ。〕

とある。日比野の『贅臆録』六月七日の条をみると、「豈ハカラシヤ、コノ堂々タル聖廟、英夷ノ住スルトコロトナリ、学校ニ晤啣ノ声ナク、タダ喇叭操兵ノ声アリ。嗟、世ノ変ズル何ゾ甚ダシキヤ」と悲憤慷慨するばかりである。

中国の官吏に威厳がなく、胥吏輩の無作法なことも、日本人の話題に上った。峰の『清国上海見聞録』には、五月八日公役に随行して上海道台を表敬訪問したときのことをのべて、

後帰ル時、道台又両門ノ外ニ送ル。送迎共ニ甚ダ礼有ルガ如シ。然レドモ其属官有司等瑣細野鄙ナル事見ルニ忍ビズ。其所為如何トナレバ、我衣服草履等ニ目ヲ属シ、或ハ手ニ取テ其値ヲ問ヒ、或ハ有司等互ニ耳語シテ其品ヲ評シ、其識見賤シムベシ。又市井ノ人我等ヲ見シガ為メニ数百ノ人、門ノ潜リヨリ窃ニ群リ来テ我前後ヲ取囲ミ、官人制スレドモ恐ルル色ナク、帰ル時道台送り来ルニ道ヲ避ケズ。其形勢実ハ法ナキガ如シ。

といい、日比野の『贅臆録』の同日の条にもそのときのことをのべて、

余官吏ノ進退ヲ目ヲ拭ヒ看ルニ、酒後ニ至リ歎息スルアリ。余輩ノ残菓ヲ撤スルニ、両三人途中ニテ袂中ヘ菓子ヲ窃入スル者アリ。嗚呼野ナル哉、卑ナル哉。想フニ賊燹煽動故ニ風俗ノ壞敗カクノゴトキカ。或ハ珍菓ニ心魂ヲ奪ハレシカ。

とある。

また峰は五月二十三日、日本側が道台をオランダ領事館に招待したときのことについて、

日本人エ応待ノ為阿蘭陀館ニ来ル途中ノ行列。直先ニ旗一本、其跡騎馬一人、涼傘一本、左右に鎗六本、赤旗四本、大旗二本、駕先劍持三人、其跡道台駕ニテ左右ニ従者四人、駕夫六人、跡ニ騎馬二人ナリ。〔此者ハ兩人共ニ近習ノ者ニテ、応接中烟草等ヲ付ケ道台ニ進メ、其外側ノ事ヲナスモノナリ。〕道台蘭館ニ入ルニ門外ニテ刀ヲ脱シ、無刀ニテ内ニ入ル。其刀ヲ持チ門外ニ待居ル者我等ニ向テ其刀ヲ拔キ示

シ、自ラ其鈍刀ナルヲ嗤笑ス。道台ノ權威ナキ事此一事ヲ以テ察知スベシ。

という。大官の外出行列の場合も日本に比べるときわめて簡単なのに注目している。名倉の『上海聞見録』にはつぎのようにみえる。

大員儀仗ヲ備ヘ他ニ出ル時、路人ハ皆左右ニ開キ立テ居ルマデナリ。又大員城門ヲ過ル時ハ防面ニ立列ス。吾邦ノ門下坐ノ意ナリト見ヘタリ。

官紀の荒廃とともに日本人の目に強く映ったのは、政策の貧困、風俗の紊乱であった。太平軍の戦争に故郷を追われた人民は、一路上海をめざして避難してきたが、政府は住宅、食糧に対して何らの施策もしていない。郊外に小屋掛けをし、小舟に乗って黄浦江上に漂流する避難民は十余万といわれ、食糧不足のために餓死するものは日々絶えなかった。しかも、阿片の吸飲者はますます多く、その輸入は増加するばかりであった。日比野の『贅脱録』には、帰途七月六日の条に、水先案内の中国人が呉淞江口から抜錨後も上海にもどらず、千歳丸上で阿片を吸飲して恍惚たる様子を詳細に記している。

五

このように取上げてくると、千歳丸の日本人が直接見聞した中国の事情には、何一つとして学ぶべきものはなかった。祖先以来、長い間憧憬の地であった中国は、何と憐れむべき情態になり下っていたことか。これが中国の内政の腐敗からではなく、欧米列国の圧迫、侵寇の結果であるとするのは、殆んどすべての人に一致した見方であった。旧体制から抜け切れない儒学者たちはもちろん、中牟田のごとき英学に通じ英語を話せる人にとっても、これは同じことだったようである。それぞれの関心事は違っても、中国の衰弱の原因が欧米列国にありとすれば、中国に次いで被害を受けるのは日本であるという恐怖心にとらわれるのは当然であった。しかも、中国のふがいない有様を見れば、もはや中国は頼むに足らず、自力をもって守るよりほかないという結論が導かれたであろう。つまり表面は攘夷を唱えたところで、それにはおのずから限界があった。高杉のごときはもともと儒家思想の持主であったが、上海の実情に接し、五代の感化を強く受けて、長州藩のためひそかに現地で汽船を買収する計画まで立てたのである。

幕末日本における中国観の変化

口では外夷だの西虜だのいって軽侮はしていても、西洋の実力には誰もが脅威を感じないではおられなかった。日本船が上海に来るといふことを、当地の中国人はすでに一箇月も前から西洋人に聞いて知っていたようで、日本人たちはその情報の確実なことに感心している。峰の『船中日録』に五月五日、呉淞江口に着いて投錨したときのことを記し、

我船碇を卸す。直に小艇より艫を押し英人老人我船に登り船室に入り数刻にして帰る。此人万国の風説を筆記して新聞紙に載せ万国に発行すると云。

とあって、新聞報道の敏速さを伝え、またイギリス人の商売に対する競争心の激烈さを次のように記している。四月二十九日のことらしく、

今朝出帆ノ節、英ノ商船俱ニ長崎出帆セリ。其船硫黄、竹島ノ中間ノ辺ニテ吾千歳丸ヲ追テ先ニ進行ス。千歳丸ハ如何故カ都テ帆ヲ不揚、四段ノ帆三段ニ及ブ。窃ニ聞、今朝出帆セシ英ノ商船ハ今五、六月発船ノ筈ナリシニ、吾千歳丸今日出帆セシ事ヲ聞テ俄ニ出帆セントナリ。千歳丸ニ積ム処ノ諸品ノ内英ノ商船ニ積居タリ。仍テ吾等ノ船ヨリ先ニ上海ニ不至バ、其価皆吾船ニ奪ハレルニ仍テナルヨシ。

英船が日本の特産を積込んで上海に行き一儲けしようとしていたところ、千歳丸の出帆を聞きあわてて同時に出帆、幸い千歳丸が英人に運転されていたので、千歳丸が上海に到着するのを故意に遅らせてもらったらしい。千歳丸の積荷が上海で思いの外さばけなかったのはそのせいかも知れず、西洋人の敏捷さには全く手も足も出なかった様子がよくわかるのである。

何百年にわたり日本の知識人にとって心のふるさどであった中国の惨状をまのあたりにして、千歳丸の日本人たちは大へんなショックを受けたに違いない。現在の中国に絶望感を抱き、中国をここまで追い込んだ西洋に強い反感をもったとしても、これを防ぐことのできなかった責任は中国自身にあるのだ。阿片戦争、南京条約の締結という未曾有の国難について起った太平天国の騒乱につけこんで、西洋諸国はアロー号事件、天津戦争、北京入城のあげく、国辱的な北京条約を結ばせたのである。初めは中国を混乱に陥れるため太平天国を利用していたかれらは、北京条約によって多大の利権を獲得すると、にわか態度を変え太平天国の打倒をめざして清朝に協力することとなった。千歳丸が上海に入港したのは、まさにそのような時だったのである。従って、たとえ西洋軍隊の援助によって太平天国が打倒されたところで、そのあとに来るべき西洋勢力の増大は当然予想されることであつた。

元治元年（一八六四）やはり幕府から派遣された健順丸の上海滞在は、同二月二十一日から四月九日に至る間で、太平天国の滅亡を二箇月の

ちにひかえたときであった。そのさいの見聞書（本庄栄治郎編『幕末貿易資料』）にも、つぎのように記されている。

支那全国不正の風習あるが為に、毛賊滅亡の期あるへからすという。其故は国敵なる毛賊に頼みを受、高利を得て欠亡品を贈与し、且つ速に事畢れは出陣、臨時の俸禄を失う事を厭て好て征討遅々に及ぶよし、故に我に勝利あるとも速に進まず一賊を誅して又一賊を逃れしむ。是残党の今日に至る所以なりとそ聞へり。

支那英仏との戦争以来、外国人の支那人に対するや奴隷の如く蔑視、既に英人の居宅最寄通行の節は高声を禁し、荷物杯運送の支那人は道端に無之ては往来も不叶、且又宗門を拡めんか為に仏人にて言語身形を支那人の如く換、在方徘徊をもいたせしよし。

改めていうまでもなく、江戸時代における日本の知識人の中国に対する尊敬は大変なもので、関心の対象は儒教から文人趣味に移って行ったが、その情熱は変らなかつた。中国人や中国文化に直接することのできる長崎に遊ぶのが、かれらにとって一生の夢でもあったのである。中国人に出会えなくとも、少しでも中国に近く互いに中国文化を共有する朝鮮人に接したいというので、十年年に一度しかない朝鮮使節の来朝を待ちかまえていた日本の文化人は多かつた。これほどまでに熱烈であつた中国に対する憧憬が、明治になると突如として中国軽侮から、さらに進んで中国侵略に変わった契機は何だつたのか。それは中国の内情や国際的な地位が明らかになってきたこと、日本としては英露の間隙を縫って東亞における有利な立場を築きうる自信ができてきたこと、国内的には過去の攘夷論の鋒先を近隣に転じたことなどが上げられるであろう。その結果は征韓論、琉球問題、台湾出兵から、ついに日清戦争に発展したのである。

このように中国崇拜から軽蔑に移つた大きな契機の一つは、文久二年の千歳丸上海派遣ではなかつたかと思う。遣唐使が廃止されてからのち、日本全国から選抜されたこれだけ多くの知識人が大挙して中国に渡つたのは初めてのことであつた。しかも当時は清朝にとってはもつとも情勢の不利なときであり、その場所は欧米列強の中国侵略基地ともいふべき上海だつたのである。この実情を見て悲観した日本の知識人が、中国の将来に絶望感をもつたのは当然のことであつた。かれらの見聞が帰国後どんなに大きな反響を呼んだかは想像にかたくない。その見聞談は全国に伝えられ、各層に浸透して、日本人の中国観を一変させてしまったのではないか。かれらの帰国後における立場や活動状況は考慮に入れなくとも、その影響力は十分に強かつたはずである。高杉や中牟田のごときは新知識を生かして幕府の倒壊を促し、あるいは明治の新政に寄与した。しかし、そのような有名人はむしろ例外なのであつて、新知識者なるが故に旧社会から阻害され、思いきつて時流に乗ることもできず、

却って不遇な一生を終えた人々もあったようである。

附

『文久二年上海日記』所収の納富介次郎、日比野輝寛の記録には誤植もまま認められるが、それは別の機会に訂正することとして、ここではG・H・Qの検閲をへて削除を命ぜられたところを補足するに止める。というのは、この書が出版されたのは昭和二十一年五月で、終戦後まだ一年にもならないときであった。編集は戦中に行われたが、印刷が始まったのは戦後のことで、校正段階においてゲラ刷りを進駐軍に提出し厳重な検査を受けねばならなかったのである。その任務を担当していたのは日本語のできる二世米人だったが、かれらの命令は絶対的で反論する余地は全くなかった。その結果、このような史料的なものでも容赦なく大幅の削除を命ぜられたのだから、一般の出版物に至っては想像に絶するものがある。従って、G・H・Qの検閲を要した時期の出版物については、全面的に検討を加える必要があると思っている。

納富『上海雜記』

一〇頁 第十二行と第十三行との間

余或時旅館ノ後巷肉店ニ就テ豚肉ヲ買ハントセシニ、主翁辭シテ明天来レト云フ。眼前洋人等ニ売リナガラ余ニ売ラザルヲ怪シミ問フニ、主翁曰ク、今日売ルトコロノ豚肉、寔ハ疫死セシ者ナリ。コノ頃悪疫鳥獸ニ及ンデ多ク斃ル。悪クキ外夷等欺ヒテ食ハシムベシ。豈敢テ日本人ニ進メテ其毒ニ当ラシメント云ヘリ。凡テ清人ノ異邦ヲ惡ミテ我皇國ヲ敬愛スルカクノゴトシ。主翁ハ姓名ヲ張雲トテ本ト書生ナリシガ、糊口ノ便ナキヲ以テ身ヲ変ジテコノ業ヲナセル由。感ズベキコトナリ。

三二頁 第六行と第七行との間

聞ク、英仏ハ五大州中ニテ強國ノ名アルモノ。然レドモ万国ノ畏ルルトコロハ俄羅斯國ナリト。案ズルニ、コレ花蘭(アメリカとオランダ)輩ノ如キハ只貿易ヲ以テ大利ヲ得ンコトヲ計リ、英仏ハ志シ驕豪ニシテ稍々モスレバ戦争ヲ起シ、暴威ヲ以テ人ヲ制セントス。又遊俠ヲ以テ名トスルニ似タリ。現今上海ニ於テモ、清國ノ囑ニ因テ屢々大軍ヲ發シ長毛賊ヲ攻伐シ、或ハ清ノ兵卒等ニ戦法ヲ教ヘ、或ハ城門塁壁ヲ

守リ、ソノ他邦ノ為ニ勤勞スルカクノゴトシ。然レドモコレ全ク実意ノナストコロニアラズ。タダ償金ノ多キヲ貪ボルガ故ナリ。俄羅斯ノゴトキハ然ラズ。ソノ国モトヨリ广大ニシテ治ネク富メリ。故ニ人心モ寛泰ニシテ、必ズシモ目前ノ小利ヲ議セズ。又不仁ノ行ヒヲナサズ。遠謀深慮有ツテ、自国ヲ堅固ニシ永ク辺塞ノ患ナカラシムコトヲ欲ス。故ニ隣国ト狎親シミ、ソノ国ノ虚ヲ見テコレヲ併吞セント欲スル意アリ。又頗ル武威有ツテ戦法ニ精シ。コレ各国ノ畏怖スル所以ナリ。

或筆記ニ曰ク、清人某英仏魯ノ三虜ヲ評シテ曰ク、仏則樸、英則驕、魯則泰。コノ言大イニ当レリ。

日比野『贅牀録』

八三頁 第十二行末「千六百万両ノツグノヒ金ヲ約ス」とあと

嗟甚哉、洋夷ノ狡猾ナルヤ。蓋シ天津ノ戦、清国ノ拙キ論ヲマタザルニ似タリ。然ルモノ内ニハ長髮賊煽乱、ソノ害十省ニオヨブ。英法ソノ虚ニ乗ジ兵ヲ構フ。実ニ危急ト云フベシ。然ルモ僧王計策ヲ設ケ防守至レリ。豈ハカラシヤ、沙姓ノタメニソノ計行ハレズ。僧王ノ心如何ゾヤ。タダ疑フ、免戦和約ヲ信ジ、眼前ノ敵ヲ攻撃セザル何事ゾヤ。兵ノ勝負、余ノ論ズルトコロニ非ズ。タダ恨ムラクハ、一戦ノ挫敗ニ膽オチ魂ウバハレ、洋夷ノ術中ニ陥リ和約ヲ結び地ヲカシ(ママ)五港ヲヒラク。ソノ害如何ゾヤ。僧王ソレ毫スルカ。然ルモノノ献言ヲ看ルニ、忠義激烈。和ヲ唱フル者ニ非ズ。僧王ノ心ソレ如何ゾヤ。満堂ノ諸士ソレ後宋一和字、天下ヲ誤ルヲ知ラザルカ。タダ後宋ノミニ非ズ。馬援叛羌ヲ討ジテソノ余種ヲ関中ニ徙ス。ソノ種滋蔓シテ遂ニ大乱ヲ醸ス。シカノミナラズ晋武劉淵ヲ并州ニオキ、遂ニ五胡ノ乱ヲ開キ天下ノ大乱ヲカモス。殷鑒昭昭タリ。方今我国腥羶ノ氣辺海ニミツ。殷鑒近ク清国ニアリ。以テイマシムベシ。

一〇一頁 第十行と第十一行との間

夜唐訳余ニ語り云フ、晡時門前ニテ男女ノ厮打ケンカアリ。一ハ英夷、一ハ広東婦人ナリ。英夷虎目ヲ怒ラシ狼口ヲハリ婦人ヲ踢倒ス。婦人石ヲ以テ英人ノ頭顱アタマヲ扶撲グツグツス。時ニ法夷三人短棒ヲ持シテスグ。速カニ英夷ヲトラヘテ棒ニテ叩撃ス。婦人自得シ英夷ヲ拳コブシニテ笑ツテ去ル。法夷ハ英夷ヲ誘フテ去ル。実ニ壯觀ナリシト云フ。蓋シ広東人ハ男女トモニ上海ヘ来リテモ城内ヘイレズ。如何ナレバ清国ノサダメニヤ、広東人ノミハ洋夷ニ役使セラルモ女ヲ妾ニスルモ自由ノヨシ。我国〇〇村ノゴトク別区ノヨシ。故ニ横浜ナドヘ来ル唐人ハ広東人多シ。窃カニ南京人ノ来ルモ至ツテスクナシ。女ハ広東ノ外一人モ洋夷ニシタガハズ。上海青楼ニテモ更ニ洋夷ノアソビヲ許サズ。ソノ意ヲ聞ク

幕末日本における中国観の変化

幕末日本における中国観の変化

ニ、ムシロ死スルモ西洋ノ鬼子ニ汚穢セラレズト。実ニサモアルベキナリ。

一一四頁 第二行「実ニサモアルベキナリ」のあと、同行「暫クシテ又市街ヲ徘徊ス」のまえ

洋夷ニ汚穢セシムルハ実ニハヅベキノ甚ダシキナリ。アル娼ノ作リシ歌ニ露だにも厭ふ大和の女郎花ヲミナノレふるあめりかにすそは穢さじ。歌ノ巧拙ハサテオキ、其志実ニ大日本ノ女トヲモワル。然ルニ金銀ニ迷テ洋夷ノ妾トナリ、甚ダシキハ其子ヲウミシ者アリト聞ク。実ニ恥ベク実ニ歎スベシ。

以上補足した文章の幾つかは、今日では人道的にも国際的にも通用しない暴論と思われるであろう。削除されなかった部分にも、同様な趣旨のところは少くない。しかし、当時は大まじめにこのように考えていた人もあるのであって、そもそも幕末の攘夷論そのものが、一切の欧米人、欧米文化を受付けないという暴論であった。過激な攘夷派の活動はそれをもととして行われたのである。これと違わない暴論、暴挙がこの間も戦争中の日本では大手を振って横行していた。今にして思えば、この世のこととは思われない、悪夢のような時期であった。だからといって、これらの文章をG・H・Qがしたように、全部抹殺してしまう気にはなれない。むだなようであるが、再現して反省の材料にするのは歴史家の任務であると信ずる。